

欧州の大学に留学する 日本人学生の間関係構築に関する事例研究

隈本・ヒーリー 順子（大分大学）

kumamoto@oita-u.ac.jp

【要約】

本研究に先立って留学動機に影響を与える要因についてアンケート及びインタビューによる予備調査を行った。3つの背景の異なる日本人学生グループを対象に留学の動機に影響を与える要因について比較考察し、留学予定の学生グループには Edward Deci と Richard Ryan によって提唱された Self-Determination Theory（「自己決定説」あるいは「自己決定理論」）を援用して、「動機づけと自己決定性の関係」の分析調査も行なった。その結果、「同一視的調整」のレベルに8名中6名が達している、概ね「自己決定性」の高いことが確認された。その高い留学動機を留学中も維持し、留学後の成果・満足度にも関係する要因は、良好な友人関係の構築にあるとして、2012年秋から欧米に1年間留学する日本人学生の間関係構築過程をアンケート法とインタビュー法で縦断的に調査してきた。そのデータを質的方法で分析し人間関係構築過程について考察するのが、本研究の目的である。

本稿は上述のデータの中から2名の学生を取りだし、「異文化友人関係の形成過程モデル」を使って事例研究として「住環境」と「友人関係構築」の関係を中心に考察したものである。同じ大学環境で英語力もほぼ同じレベルで留学をスタートした学生が留学の成果が異なった要因は、住環境の違いに起因する友人関係の形成にあった。また、インタビューのデータからコーディング分析しカテゴリー化する方法も試みたが、質的研究方法はそれぞれ一長一短があり、いくつかある研究方法の中でどれを使うかは今後の課題としたい。

1. 今までの動機に関する研究

本研究に先立ち留学動機に関する予備調査を実施し、アンケート分析から留学動機に影響を与える要因を洗い出し、その結果を2012年開催の日本語教育連絡会議で発表をした。留学の動機に影響を与える要因として、「留学生と接触する機会がある」、「チューターとしての経験の有無」、「その留学生との交流」の点を考慮して、被験者を「留学予定者グループ」、「チューター経験者グループ」、「チューター未経験者グループ」の三つに分けた。それぞれグループ別に留学したい理由、できない理由等についてアンケート調査を行い、留学予定グループの学生には留学動機についてインタビュー調査も行い、二つのある要因が動機づけに深く関係していることが明らかになった。

動機に関する研究は、心理学の分野ばかりでなく第2言語習得において学習動機としても広く研究されている。その言語習得の分野で援用されている動機づけ理論を使ってそれを枠組みとした。まず、

海外留学に関する動機の定義については、第二言語習得研究における動機に関する理論の中で使われる「言語学習動機」の定義を借用する。動機研究における第一人者である Zoltan Dornyei は言語学習動機を 2 つの面からとらえている。(Dornyei 2001) それは、動機は人間の行動の「方向性」と「強さ」を持つということである。この「方向性」というのは、学習者の意識を言語学習に向かわせる力であり、「強さ」とは動機づけの過程において動機も強くなったり、反対に弱まったり変化するものであると捉える。つまり、この「言語学習動機」の定義を留学の動機づけにおいて説明すると、「方向性」とは具体的に、「留学に関して情報を集めたり、留学に必要な外国語の学習を始めたり、それらを継続させる力」である。留学の動機の強さ(弱さ)も連続する一定の方向線上にとらえ、時によって変化するものである。動機は、時によって外因的・内因的要因により「強くなったり弱くなったり、あるいは全く無くなってしまふ」こともあるのである。

通常、動機については内発的動機 (intrinsic motivation) と外発的動機 (extrinsic motivation) の概念が使われ、それらの概念の定義は研究者によって異なり、いくつかの理論として提唱されている。動機の理論的枠組みとしては、Edward Deci と Richard Ryan (Deci & Ryan; 2000, 2002) によって提唱された「自己決定説」あるいは「自己決定理論」(Self-Determined Theory、略して SDT) は、動機づけを説明する理論として有効なものと考え本研究でも援用することにした。この理論は、言語学習の分野だけでなく、薬物治療などで実際の治療法 (Motivational Interview 等) の理論的な背景となって広く応用もされている。この自己決定理論で提唱されている動機については、大きく 3 段階に分類されている。それらは、「無動機 (amotivation)」から「外発的動機 (extrinsic motivation)」を経て「内発的動機 (intrinsic motivation)」まであり、「自己決定性 (self-determination)」(あるいは「自律性 (autonomy)」) の強さによって、順に高くなっていく。さらに、この「外発的動機」の中には 4 段階に分かれ、「外的調整 (external regulation)」から「取り入れ的調整 (introjected regulation)」 「同一視的調整 (identified regulation)」 「統合的調整 (integrated regulation)」の段階へと「自己決定性」の強さによって高くなっていく。

この過程段階について、留学する直前の 8 名のインタビュー結果から留学決定時までの動機づけと自律性の関係についても考察したが、「取り入れ的調整」が 1 名、「同一視的調整」が 6 名、「統合的調整」が 1 名であった。当然のことながら、留学する学生達の動機段階については「自己決定性」の高い学生が多かった。

2. 調査方法・被験者

本研究は 2012 年の秋から欧米の大学に 1 年間留学する日本人学生を一サイクルとして縦断的に調査し、留学を成功させる要因の一つとしてどのような人間関係を構築していくか、その過程を観察することにあり、研究は継続中である。現時点まで、留学したグループは二つあり、今回の分析は第 1 グループである。そのグループの被験者とは、2012 年の夏あるいは秋から 2013 年の夏まで本学の欧米の国際交流協定校 (以下、協定校) に留学した 14 名の学生が対象である。留学先はアメリカ 4 名、オランダ 5 名、フランス 2 名、ドイツ 4 名である。第 2 グループは 2013 年秋から 2014 年なるまで留学

したグループであるが、データを分析中であり本稿の調査対象とはしない。

2年あまりの期間に膨大なデータが蓄積されてきているが、その中で今回特に取り上げたのは帰国後に行った、留学成果についての満足度である。1から5までの5段階（1が最低で5が最高）で自己評価をしてもらったが、14名中、5が10名、4が2名、3が1名、2が1名と回答し、概ね留学の成果はあったとするものがほとんどであった。しかし、その中で2と回答した学生と5と回答した学生は同じ協定校で学んだ学生達であった。では、何がこのような自己満足度の違いを生じさせることになったのか、その要因についてさらに調査したいと考え事例研究とした次第である。

研究データは、留学前、留学中、それに留学後に、それぞれアンケート調査と半構造化インタビューによる方法によって得られたものを中心に分析した。

3. 自己評価：その高評価の理由

自己の留学の成果について高く評価した学生は、その理由として以下、5点をあげている。

(1) 留学先で知り合った現地学生、留学生、教職員、家族との交流がうまくでき、勉学以外に楽しい経験をしたことである。特に、学生同士の交流の「深さ」が一番大きいようである。「深さ」とは、交流が目的のイベント、行事等に単に参加するだけでなく、それをきっかけにして継続的かつ日常的な交流があり、それがどれだけ深く発展していったかによる。よく交流があったのは、同じ大学に留学する学生との交流があげた学生が多い。異国で生活しているという共通点がある留学生同士は、最初の接触時に会った留学生と会話の糸口を見つけやすいのかもしれない。

次に、現地の学生との交流は大学によってばらつきがあった。つまり、大分大学に留学生したことがある学生がいて、ある一定期間双方の学生交流がバランスよく行われていることや、学生主導の活発な国際交流行事が展開されている機関では、現地の学生との交流が活発に行われ、発展していくようである。

また、事例として多くはないが、留学先の教職員たちとの良好な関係、現地の家族との親密な交流を理由としてあげている学生もいる。教職員が様々なレベルで積極的に留学生を支援している場合がある。また、ホスト・ファミリー制度がある協定校は1校しかないが、家族との親しい交流の機会が与えられている場合もある。ホスト・ファミリーと言っても到着時とその後、特別な行事で数回訪問する程度であるが、家族の一員として受け入れられ、日本人学生にとって彼等と過ごす時間は学内では味わえない体験として忘れがたいものとなっている。

(2) 「コミュニケーション・スキルの上達」が2点目である。これは英語で言う「interpersonal communication skills」のことである。今の日本の若者は他人とのコミュニケーションが苦手とよく言われるが、事実、海外に行って克服しなければいけないことの一つとして学生自身が語っている。留学前と後で、自己変化したこととして、「人前で話せることに抵抗がなくなった。」とか「知らない人に積極的に話しかけられるようになった。」と回答している。そして、この変化を歓迎すべきものとし

て認識し、高評価の理由になっているのである。

(3) 第3点目は「外国語の上達」である。当然のことながら、すべての学生は上達することを留学前に期待している。しかし、1年間の留学で外国語能力の伸びは個人差があり、この点を高評価の理由としてあげている学生は少ない。ただ、留学前と後では格段に伸び、自他共に認識されている場合は、目に見える成果として自信につながっていることが観察される。

(4) 留学前に留学に期待するものとして、多くの学生が「様々な視点の獲得・視野の広がり」をあげている。ほとんどの学生は、留学後に異文化体験をとおして獲得された視点の広がりを認識し、成果の一つに数えている。

(5) 「人間的成長」も(3)の外国語能力のように具体的に目に見える成果ではないが、留学前に留学に期待するものの一つである。この抽象的とも思える成果は客観的に評価しがたいが、留学後の成果としてあがっている。

4. 高評価した学生が留学した大学の留学生支援環境

高評価した学生が留学した大学とはどのような機関か、その機関の留学生への支援環境について考察する。まず、これらの大学に共通する支援環境とは何かを明らかにすると、以下、8つがあげられる。

- (1) 大分大学に留学にし、その留学に満足した現地学生が存在し支援活動に加わっている。
- (2) 留学生を支援する学生グループが存在し、活発に活動している。
- (3) チューター（あるいはバディ）制度がある。
- (4) 日本語科あるいは日本語コースがあり、その日本語学習者が日本人留学生を支援している。
- (5) 日本語ができる教職員が存在し、日本人留学生の相談にのっている。
- (6) アジアや欧州からの留学生が多く存在する。
- (7) 日本語はできないが、留学生一般に対して教職員からの多大な支援がある。
- (8) 公式あるいは非公式の留学生に対する学習支援がある。

このような環境におかれた場合、生活・学習面での課題に直面しても学生自身の努力と周囲(特に、留学中に得た友人達)の支援によって克服することが多い。

5で取り上げる事例研究では、同じ大学で学んだ学生の自己評価が大きく分かれるケースである。同じ環境で学び、留学成果の自己評価が異なる場合、彼等がどのような1年間を送ったのかであろう。この二人のデータを人間関係構築のモデルを使いながら分析する。

5. 事例研究：二人に共通する環境と課題

欧州の大学に留学した2名の学生を学生A、学生Bと呼ぶ。学生Aは男子学生でその自己評価は

5であり、学生Bは女子学生でその評価は2である。

まず、二人に共通する大学環境を前節の(1)から(8)までの支援環境と比べて見てみよう。

(1)については、大分大学に留学にした現地学生は過去に1名いたが、別の学部にも所属し、当該学生の留学時には大分での留学経験者は皆無であった。(2)について、留学生を支援する学生グループはいない。(3)チューター(あるいはバディ)制度はない。(4)の日本語科あるいは日本語コースはない。(5)日本語ができる教職員はいない。(6)欧州に比べると、アジアからの留学生が少ない。(7)留学生受入の支援制度はあるが、欧州からの留学生に比べてアジア、特に日本からの留学生に関する知識、経験がない。(8)公式あるいは非公式の学習支援は十分でなく、日本人留学生に対する英語力支援はない。特に、日本人学生の文法知識とコミュニケーション・スキル習得の偏りを十分認識できていなかった。

二人に共通する留学当初の課題は英語力不足である。まず力不足の顕著な例として、誤って上級レベルの専門科目を登録し、担当教員が学期半ば過ぎのレポート提出時に気がつき、国際交流担当者に連絡して急遽、大騒ぎとなった。学生自身もそれまで認識していなかったことも悪いが、受入側が二人に対して十分な履修指導もしていなかったのも問題であった。事情聴取の際に英語の会話力とコミュニケーション・スキルの低さもあり、受入機関の教員と国際交流担当者は二人の英語力を過度に低く評価してしまった。その結果、前期は、通常の授業は履修できず(つまり、1学期間、交換学生としての必要なコマ数も確保できず)、僅か週1回の英語の補講授業にしか出席できなかった。このようなスタートをした学生がその後どのように留学生活を送ったかであるが、「異文化友人関係の形成過程モデル」(工藤 2003)を参考にしながら、彼等の住環境が人間関係構築にあたってどのように影響したのかを次節で見てみる。

6. 考察1：学生Aと学生Bの友人関係構築について

「異文化友人関係の形成過程モデル」についてまず、言及する。

工藤によると、このモデルでは4つの段階があり、第1段階は、日本人留学生が他人との接触する機会を持つことが必要である。まず、住居や大学でホスト(現地学生、留学生等)と接触することである。これを「物理的・機能的・社会的接近性」と呼ぶ。そして、その接触から「自己開示・共行動」をしながら、お互い「友人観・相性の合致」を確認する第2段階に入る。そして、次は「関係的・異文化アイデンティティの形成」をする第3段階へと発展していく。最後の第4段階は、その形成を強化する段階である。

次に、二人の学生は留学時の課題をどのように克服し、その後の両者の友人関係構築の違いを顕著にした要因が何であったのか、ということについてふれたい。

学生Aと学生Bは共に英語運用能力が低いことは既述したが、留学後の6ヶ月後に筆者が彼等を訪問しインタビューを行った際、両者の英語でのコミュニケーション力に大きな違いがあることに気づいた。学生Aはすっかり生活にも慣れ、現地の学生との英語使用にも自信がついているのが見て取れた。一方、学生Bは友人と呼べる人もなく、英語によるコミュニケーション力も余りついていないこ

とは明らかであった。これに関しては学生 B 自身も認めていて、学生 A との違いを意識していた。このような違いをもたらしたものは、彼等の住環境が大きく異なっていたことにあると考えられる。

両者はアパートタイプの学生用の住居に住んでいたが、その住形態は大きく異なっていた。学生 A は 4 人部屋で、寝室以外、台所、浴室、居間を 4 人の留学生と共有した。学生 B は 2 人部屋で、前期、寝室以外のすべてを 2 人の留学生と共有したが、後期はそのルームメイトが帰国し 1 人で住んでいた。また、学生 A の住む棟は、常に外からの学生の出入りが多く、集まった学生達が頻繁にパーティをすることでも知られていた。静かに勉学に励みたい学生にとってはいい環境ではなかったが、常に他人との接触する機会があり、到着時には皆に囲まれ寂しい思いはしなかったと学生 A と述べている。学生 A が住むアパートは学生との頻繁な社交の場でもあり、第 1 段階のホストとの「接触」の機会は十分あったのである。一方、学生 B は、静かな環境で、特に後期からは誰にも邪魔されずに生活できる環境であったが、「物理的・機能的・社会的接近性」と呼ばれる、第 1 段階のホストとの「接触」の機会がほとんどなかったことである。前期は学生 A との英語の授業のみで、ルームメイトの留学生との交流だけであったようだ。この住環境の違いが二人のその後の留学生活に影響を与えたと言えよう。もちろん、外因的要因だけでなく二人の性格等、内因的な要因に由来するかもしれないが、それはまた別に論議すべき大きな課題であり、今回はその要因は考慮しない。

異文化友人関係の構築過程について、学生 B の場合は、そもそも第 1 段階である「ホストとの接触が始まる機会」がなく、それから友人構築に発展する過程は観察できない。しかし、学生 A は第 1 段階から次の段階、共に行動し留学生の中から相性の合致する人を見つけ、「関係的・異文化アイデンティティの形成」、そして、「その強化」へと進んでいったことが観察された。同時に、その友人構築の成果が英語の運用能力も伸ばしていった。また、その英語力の伸びが後期の他学部の授業の履修を可能にし、学生 A は前期で帰国してしまった留学生の代わりに、現地学生との交流の機会も増え、ホストの中身も変容していった。

7. 考察 2 : データのコーディング分析におけるカテゴリー化

山川 (2013) ではインタビューのデータをコーディングし、カテゴリー化する分析方法を用いているが、本研究の場合、学生 B のデータを同じ方法で分析できないし、その両者の分析結果を比較することもできない。しかし、学生 A については分析可能であるので、この節では簡単に学生 A の分析結果にふれる。山川 (2013) は「ルールの共有」、「空間の共有」、「時間の共有」の三つカテゴリーを生成し、最終的には一つのカテゴリー「寮のシステムの環境」に集約している。

まず、学生 A とのインタビュー・データから、住環境・学習環境と友人関係構築に関連のある部分を抽出し、カテゴリー化してみる。学生 A は、まず、初めて会った時から皆に対して、お互いにファーストネームで「呼びすてにする」ことから学んでいかなければならなかった。しかも、自己紹介するときもフルネームではなく、ファーストネームでしかも、それを外国人にとって呼びやすくするなどの努力をすることも自然に学んでいった。欧米の大学に留学した日本人学生にとって、全く日本とは異なる「ルール」は第 1 段階のホストとの接触の機会を次の段階に進めるために獲得しなければな

らない最初の重要な「ルールの共有」である。

学生 A の住環境は、共有すべきスペースである居間にはルームメイトだけでなく、多くの学生が集まるコミュニケーションの場であった。また、台所もルームメイトと共有し、パーティがあるときは非共住者とも共に料理する場所でもあった。また、社交的なことばかりでなく、他の学生からは履修科目、学習についての情報を得る機会にもなっていた。つまり、学生 A にとって住居は多くの学生と「空間を共有」するところであり、英語によるコミュニケーションスキルの上達にもつながる環境になっていたのである。

また、「時間の共有」についても学生 A の場合、十分と言えるほどであった。ルームメイトや他の留学生達と買い出しに出かけたり、一緒に外に食べに行ったり飲みに行ったりして日常レベルのつきあう機会が多々あり、それが「多くの時間を共有」することにもなった。それは、お互いを知るいい機会であり、それが、友人関係構築の過程をさらに第 3 段階、第 4 段階へと押し上げていくことになったのである。

学生 B の場合は、たまたま入居したところが学生 A の宿舎タイプとは違っていたわけで、学生 B のせいではない。彼女の住居は、学生 A と比べ、きれいで大学に近い場所に位置し申し分のないものであった。ただ、英語の補習以外、特に彼女を支援しようとする人も組織もなかったことが「孤立」してしまうこととなった。しかし、インタビューのデータを見る限り、彼女は積極的に友人関係を構築しようとあえて努力した様子は見受けられない。学生 A の「変化」、「自分との違い」を認識しつつも、特に自分のやり方で友人を作ったり状況を打破したりしようとは思わなかったようである。事実、2013 年秋に大分大学に留学予定であった現地学生 2 人にも留学中に会えるよう、筆者が学生 B のために手配したが、彼女はその機会すら利用しようとはしなかった。

8. まとめと今後の研究課題

学生 A も学生 B も留学には様々な期待を抱いて日本を出発したが、留学直後に遭遇した履修上の躓きも、その原因であった英語の運用力の低さも二人に共通していた点である。しかし、居住形態の違いから学生 A は、いやがおうにも学生と常に英語でコミュニケーションをせざるを得ない生活環境に置かれていた。それが英語の運用力のアップと人と人とのコミュニケーション・スキルの上達にもつながり、結果として英語を話すことへの抵抗がなくなりやがて自信にもつながっていったのである。

また、学生 A は後期、経営学部を離れ、自分が好む他学部の科目のみ履修したことがさらにプラスとなったようである。それは、その学部では彼の英語力を疑問視することはなく（つまり、留学当初の英語力の問題について把握していなかったようで）、フルタイム学生に課される 30ECTS 単位相当の科目が履修できたことである。そして、その授業で現地学生との交流の契機ともなったのである。ただ、前期は友人関係構築にはプラスであった住環境は、後期学習に集中するには決していい環境ではなかったため、居住場所にいる時間を減らし、必要に応じ図書館等の施設を利用したという。

一方、学生 B は後期も前期と同じ経営学部の授業を履修したが、英語力不足と判断されたため、学

生 A のようにフルタイム学生のワークロードの半分しか履修が許されなかった。

このような留学生活を送った後、二人の留学成果について自己評価の違いが出てくるのは当然のことであろう。この二人の事例研究から言えることは、留学の満足度は友人関係の構築が影響することをあらわしている。この場合、学生にとって留学当初いかに多く「接触する場」があるかどうかが重要であり、そして、学生がそれを友人関係構築の機会と捉え、イニシアティブを取って積極性に挑戦していくことも必要である。

欧米の大学に留学する日本人学生の人間関係構築過程の解明を目的に研究を開始し、2012年から1年間の留学生活を送る日本人学生を対象に縦断的に調査してきた。本研究の方法は被験者の数が多くないので量的分析方法より質的方法を選び、分析を試みている。本稿は、そのデータの中から、「同じ留学環境」であるのに成果が異なる二つのサンプルを選び、一つの事例として研究に取り上げた。

今後、今まで集積してきたかなりの量のデータをどのような方法が一番分析に適しているのか、選んでいかなければいけない。いくつかある質的な研究方法の中で、以下、三つの方法を検討している。それは、川喜多二郎のイニシャルを取って名付けられた「KJ法」、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」、量的・質的方法の両方の利点を持つと言われる「PAC (Personal Attitude Construct)法」である。ただ、質的方法はそれぞれ一長一短があり、いくつかある研究法の中でどれを使うかは今後の課題としたい。

参考文献

[和文]

木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂

工藤和宏 (2003) 「異文化友情形成におけるコミュニケーション能力-留学生の知覚に基づくモデル化の試み」 『ヒューマン・コミュニケーション研究』 第31号、15-34.

隈本・ヒーリー順子 (2012) 「日本人学生の海外留学動機づけに関する要因」 『大分大学国際教育研究センター一年報 2012年度』 59-67.

佐々木泰子・張瑜珊・鄭士玲 「中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか -修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究-」 『異文化間教育』 35、104-117.

佐々木由美 (1998) 「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話-同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」 『異文化間教育』 110-127.

佐藤郁哉 (2011) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』 新曜社

高井次郎 (1994) 「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」 『異文化間教育』 106-116.

高濱愛・田中共子 (2012) 「日本人留学生の帰国後のケアを目的とした自助グループ活動」 『異文化間教育』 35、93-103.

中島智子 (2012) 「異文化間教育研究とインタビュー法」 『異文化間教育』 35、32-49.

山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」 『異文化間教育』 38、100-115.

やまだようこ (2007) 『質的心理学の方法：語りをきく』新曜社

[英文]

Deci, E. & Ryan, R. (Eds.) (2002) *Handbook of self-determination research*, Rochester: University of Rochester Press.

Dornyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dornyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*, Harlow: Longman.

Ryan, R. & Deci, E. (2000) "Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being." *American Psychologist*, 55, pp.68-78.

インターネット・サイト

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/12/_icsFiles/afieldfile/2010/12/22/1300642_1.pdf

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/14/1286522_1.pdf

<http://www.ond.vlaanderen.be/hogeronderwijs/Bologna/>

Sophie Arkoudis (メルボルン大学：Centre for the Study of Higher Education)

http://www.cshe.unimelb.edu.au/research/experience/docs/FindingCommonGround_web.pdf

大学データブック 2012 (ベネッセ)

http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/dai_databook/2012/

留学生実態調査 (日本学生支援機構)

http://www.jasso.go.jp/study_a/documents/k_h23_02.pdf

本研究は、平成 24 年度-26 年度 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 「WEB を利用した欧米の大学に留学する日本人学生の人間関係構築過程に関する縦断的研究」(研究代表者：隈本順子) の助成を受けて行われている。